
 序にかえて

人生途上の出会い－発育学

女子栄養大学教授
発育健康学研究室 小林 正子

定年を節目に、改めてこれまでの道をふり返ってみると、期せずして1本の道につながったようにも思えるが、大学卒業後は先が見えず、「道に迷っているばかり」の時代が長く続いていた。

私の記憶から消えかけている最初の仕事は、製薬会社の研究所勤務であった。そこは栃木県野木町の広大な栗林が続く敷地横にある閑散とした場所で、それでも大学卒業時は、少なくとも何かしらの希望をもって入社したのだろうと思う。だが入ってみると同年代男子と1万円もの給料差があり、当時5万円ほどの初任給で1万円もの差がつくのは到底納得できなかった。しかし友人からは、公務員を除いて殆どの会社の給料は男女差があるものだと言われ、女子高、女子大で自由に過ごしてきた私は、男子が社会でどのように処遇され、女子はどれだけ差別されているかということを、現実には直面するまで考えもしなかったのである。

研究所での生活は工場と一体化しているため朝が早く、8時15分から始業だが、その前に上履きを洗い、体操をして朝礼があった。それを毎日繰り返すと、なんとなく何かの矯正施設に入れられている気分になってきた。繊細なのかひ弱なのか、私はすぐ体調を崩して胃潰瘍になり、痛みのため職場で倒れた。とても恥ずかしかった。そして、ここから逃げよう、と決意した。入社5カ月目である。

その後、化粧品会社の商品開発、NHK 学校放送番組の化学実験者、塾講師、医学部の研究助手、家庭教師……と転々とし、ようやく世の中の仕組みも少し分かってきた頃に、差別がいやなら教員になるしかないと思うに至り、遅ればせながら高校教員として人生を再出発しようと決意した。

ところが、思いがけない波乱が待っていた。夫が長崎に転勤になったのである。転勤はあると覚悟していたので、単身赴任でどうぞ、と思ったところ、なんと夫の母に、絶対ダメ、付いて行きなさい！と言われてしまった。せっかく教員になって今度こそはと思っていたのに、私は仕方なく高校を休職し、「泣き泣き」長崎に付いて行った。

しかし、皮肉なことに長崎はとても楽しかった。上の子は小学2年生、下の子は幼稚園に入り、昼過ぎまで自由な時間ができた。いくつか習い事も始め、また暇だろ

うと思われてPTAの役員も回ってきた。そして瞬く間に2年が過ぎた。その頃、さすがに私は「帰ったら何をしたらよいのだろう……」とちょっぴり不安な気持ちが胸をよぎるようになっていた。しかし浦島太郎ではないけれど、そんな気持ちも日々の楽しさに吹き飛ばされた。

ところがある時、小学生の娘が毎月、体重だけ測定されていることに気が付き、疑問をもった。なぜ身長は年3回なのに体重は毎月測るのだろうか？そこで、小学校の養護教諭に尋ねると、返ってきた答えは「体重は、からだの総合量です！」というもので、キョトンとした私に、養護教諭はさらに、「広島と長崎は戦争で原子爆弾を落とされ、その後子ども達が後遺症で次々に体調を崩し、病気になっていった。手遅れになる子どもも多かった。そこで、そうした子どもを早く発見するために、戦前、広島県の女学校で、体重を2週間ごとに測って生徒を一人も重い病気にしなかった校医さんがいたということで、せめて1カ月に一度体重を測定し、子ども達の健康を守ろうということになった。その習慣が今でも続いている」と説明を加えた。私はショックと共に大きな感動を覚えた。たかが体重で、健康状態が分かる？体重はからだの総合量？その言葉はいつしか私の中で根を下ろし、決して忘れられないくらい膨らんでいった。また同時に、子育てをしているのに、そうしたことに全く無知で、自分の将来のことばかり気にしていた自分を反省した。

3年後、以前の高校に復職したが、私の中には、子どもの健康、子どもの発育への関心が高まっていた。そして程なくしてその研究のために大学院を受験し、進学した。化学を学んだ私には大きな方向転換で迷いもあったが、何か抗い難いものが背中を押した。たぶんここからが今に続いているのであろう。しかし、いろいろなことに挑戦しては玉碎し、うろうろしては何とか進むべき道を模索してきたそれまでの人生は、決して無駄ではなかったと思う。いや、その過程がなかったら「発育学」にも出会わなかったに違いない。

その後、小学生はいつ肥満になるのか、という研究課題で、長崎から毎月測定の体重データを頂き、「小学生の肥満は夏休みに始まる」という論文に仕上げた。これは今でも真実であり、その後多くの研究者が同様の結果

を発表している。娘2人と自分の1日2回の身体計測（身長・体重・座高）は基礎研究と考えて実施したが、5年間継続して時系列解析すると様々な発見があり、修士論文、さらには博士論文にまとめることができた。

近年は成長曲線活用の普及に努め、身体計測値を发育基準曲線上にプロットできる「发育グラフソフト」を開発して、学校や保育園に無償提供している（この研究費として、最初は科研費、その後学園から長期間支援を頂いたことに感謝申し上げます）。

しかし、发育の研究はまだ奥が深い。70歳を迎え

るに当たって、さらに改めて考えることは、この先どれ程のことができるだろうか？まだエネルギーは残っているだろうか？ということであるが、それはまだわからない。人生途上で出会った发育学を続けていくのか、はたまた別の道を歩き始めるのか……それもわからない。ただ昔と違ってはいることは、焦りが無い、ということである。自分のやりたいことを、少しずつ気の向くままにやっていけたら……きっと幸せなのだろう、と思っている。

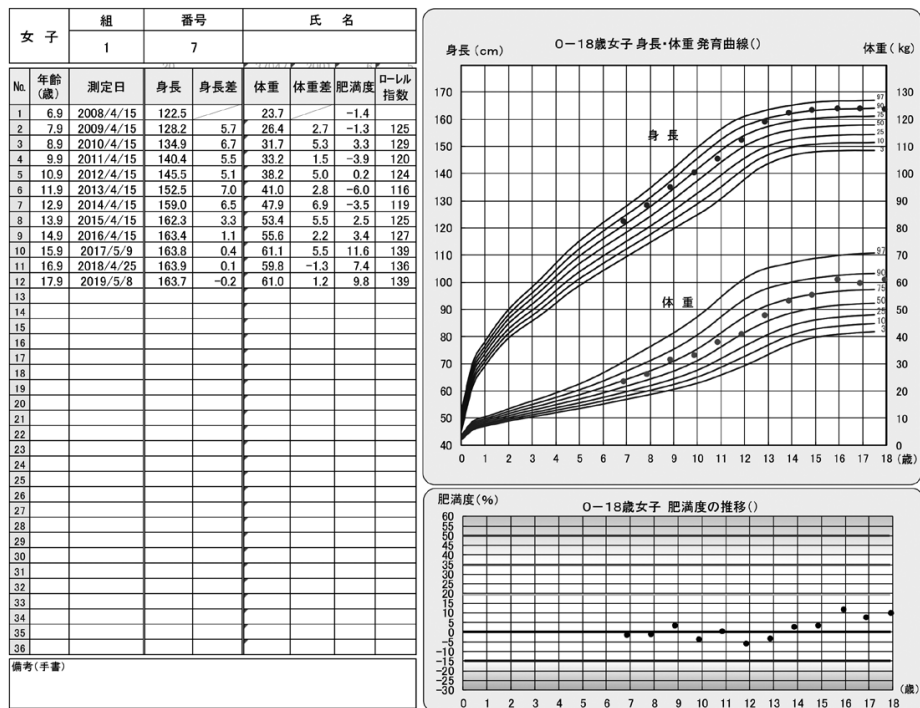


図 「发育グラフソフト」の個人画面